

「動物哀歌」の詩才顕彰



村上について弾き語りする溝渕和雄さん(左)、村上成夫さん

盛岡市の詩人の村上昭夫(1927〜88)を記念する「こおろぎ忌」が13日、盛岡市中ノ橋通のプラザおでこで開かれた。村上昭夫生誕85周年記念事業実行委員会(高橋克彦委員長)が主催し、約150人が参加した。村上の代表作「動物哀歌」の朗読やパネルディスカッションで、岩手を代表する詩人と文学を論じた。今後は村上の命日の10月11日の時期に毎年、詩人をしのび、顕彰する。

村上昭夫こおろぎ忌 生誕85周年にちなみ開催

村上昭夫は27(昭和2)年、東磐井郡生まれ。39(昭和14)年に岩手中入学、満州国八ルビンで終戦を迎え、抑留を経て帰国した。戦後は詩作に目覚

め、県詩人クラブの結成に関わった。結核と闘病しながら精力的に創作し、67(昭和42)年「動物哀歌」を出版。土井晩翠賞、日氏賞を受賞。文壇の期待を集めながら翌年、41歳で病没した。

「こおろぎ」は村上の代表作の「五億年」などに登場し、村上作品を象徴する詩句として選んだ。実行委員会事務局の赤澤征夫さんは「村上昭夫という詩人が忘れられているのは残念。啄木の没後100年と同じように村上をしのびたい。かなり以前には「こおろぎ忌」という名前で行われたことがあったと聞くが、今後も今の時期に村上の碑前に集まるなどしてやっていきたい」と話し、先人として改めて光を当てる。

ステージで村上の実弟の村上成夫さん(71)が兄の作品を朗読し、思い出を語った。成夫さんは「昭夫はよく『なぜ詩を書くのか』という問いに、『世界が一番大切なところ間違っているものだから、それを正してみたい気持ちがある。うその世

間や自分に対する闘争が自分の詩なのだ』と言っていた」と述べ、兄の苦悩を代弁した。このあと高橋氏をコ―ディネーターに詩人の齋藤彰吾氏、北畑光男氏、城戸朱理氏、歌人の岡澤敏男氏が村上を語った。高橋氏は宇宙まで含められているかもしれない昭夫さんの魂に、われわれは少しも近づいていない」と述べ、文学者として敬意を払った。

村上と岩手中学の同級生の岡澤さんは「村上君が詩人の最高賞をもらったと聞いたとき、同級生はみんな驚いた。村上君に文才があったようには見えなかったから」と回想した。文学に向かった動機を、終戦後の満州からの引き揚げ体験に求め、国家や人間性の崩壊を目の当たりにした衝撃を指摘した。

参加した盛岡市の主婦の深澤順子さんは若いころからの村上ファン。「知人から『動物哀歌』をプレゼントされ、感動した。涙が落ち、心が浄化されるようだった」と話していた。